

IV 乳がん検診についての検討

1 検診方法

(1)マンモグラフィによる検診

- マンモグラフィによる乳がん検診については、現在のところ、50 歳以上においては検診による乳がんの死亡率減少効果があるとする十分な根拠がある。また、40 歳代においては検診による乳がんの死亡率減少効果があるとする相応の根拠がある^{*1}。
- これらのことから、乳がん検診におけるマンモグラフィの適応を40 歳以上とし、マンモグラフィによる検診の普及を一層推進すべきである。ただし、40 歳代は、乳腺密度が高く、精度が十分でないため、マンモグラフィは2方向撮影とすべきである。

(2)視触診単独による検診

- 視触診単独による乳がん検診については、現在のところ、検診による乳がんの死亡率減少効果が無いとする相応の根拠があるとされている^{*1}。

(3)マンモグラフィと視触診の併用検診

- 乳腺組織が発達している閉経前後の女性においては、マンモグラフィ単独では十分な精度が得られないため、視触診をマンモグラフィと併用して実施すべきである。また、精度管理が適切に行き届いたマンモグラフィによる検診の実施体制が整備されるまでは、精度を補完するためにマンモグラフィと視触診を併用するのが妥当である。
- マンモグラフィに併用して実施する視触診についても、その精度管理が重要であり、医師会や関係学会等が開催する研修を受けた者等の習熟した医師によって実施されなければならない。

(4)超音波検査

- 超音波検査は、乳がんの臨床において有用な検査であるが、現在のところ検診における乳がんの死亡率減少効果について根拠となる報告はなされていない^{*1}。
- このようなことから、超音波検査について、今後その有効性の検証を行うと

ともに、機器や撮影技術及び読影の技術の標準化、検診における診断基準の確立が課題である。超音波検査については、今後、マンモグラフィで病変が描出されにくい、乳腺組織の発達した受診者に対するの活用を検討すべきである。

2 検診対象

(1) 検診の対象年齢

- 30 歳代については、現在のところ、検診による乳がんの死亡率減少効果について、根拠となるような研究や報告がなされていないため、今後引き続き調査・研究を行うことが必要である。
- 本検討会としては、乳がんの罹患の動向や検診による死亡率減少効果、発見率等から総合的に判断し、40 歳以上とすることが妥当である。

(2) 検診間隔

- わが国において、視触診とマンモグラフィによる併用検診の適正な受診間隔について、早期乳がん比率と中間期乳がん発生率から検証した結果^{※7}、2年に1度とすることが適切である。

V 子宮がん検診についての検討

1 子宮頸部がん検診

(1) 検診方法

- 子宮頸部の細胞診による子宮頸部がん検診は、現在のところ、検診による子宮頸部がんの死亡率減少効果があるとする十分な根拠がある^{※1}とされており、精度の高い検診手法である。わが国の子宮頸部がん検診の精度管理については、欧米諸国と比べて同等以上の水準にあると言われている。
- 子宮頸部がんの原因となるヒトパピローマウイルスの検査は、現在のところ検診による子宮頸部がんの死亡率減少効果について根拠となる報告がなされていない^{※1}。検診としてのヒトパピローマウイルス検査は、今後その有効性の検証を行うことが必要である。

(2) 検診対象

ア. 検診の対象年齢

- 子宮頸部がん検診の対象年齢については、20 歳以上を受診可能とし、特に若年層に対しては、活発な性活動などの危険因子の周知により積極的な受診を促すべきである。

イ. 検診頻度

- 子宮頸部がん検診については、受診間隔を延長しても有効性が十分保たれるという報告^{※8※9}があり、2～3年に1度の受診頻度で有効性が示されている。
- 罹患のリスクが上昇傾向である 20 歳代に対して十分に受診の機会を提供することや、実際に市町村が実施・管理する体制等を勘案し、総合的に判断すると、2年に1度とすることが妥当である。
- 過去に検診を受診したことが無い者については、特に積極的な受診が求められる。また、わが国では、初回妊娠時に初めて産婦人科を受診するということも多いことから、妊婦健診時に、子宮頸部がん検診も併せて実施していくべきである。

2 子宮体部がん検診

(1) 検診方法

- 子宮体部の細胞診による子宮体部がん検診は、現在のところ、検診による子宮体部がんの死亡率減少効果について根拠となる報告はなく^{※1}、引き続き検討が必要である。早期発見は、子宮の温存につながる可能性があり、死亡率減少効果のみならず、このようなQOLの観点も含めた有効性の検証が必要である。
- 検診により発見されたがんと外来受診で発見されたがんの比較では、検診発見群の予後が良いという報告がある^{※1}。一方、検診による子宮体部がんの診断について、現在行われている子宮体部の細胞診は、子宮頸部の細胞診に比較すると、感度がやや劣るという指摘がある。
- 子宮体部の細胞診の採取時には、軽微な疼痛や出血を伴うことがある。また、未産婦や帝王切開による分娩のみの経験を持つ閉経女性に対しては、子宮口閉鎖などにより、子宮体部の細胞診の実施が困難な場合もある。
- このように、子宮体部の細胞診については、検査の安全性や精度についてのガイドラインの整備が必要である。

(2) 検診対象

- 有症状者(ハイリスク者)に対しては、十分な安全管理のもとで多様な検査を実施できる適切な医療機関の受診を勧奨すべきである。
- 有症状者(ハイリスク者)に対しては、検診の場での画一的な検査の実施に止まらず、個別の診療の場で十分な説明と評価がなされることが原則であるが、子宮頸部がん検診受診時における有症状者(ハイリスク者)で希望者については、検査の安全性や精度等について、十分に説明し、同意を得た者に対し、子宮体部の細胞診を行うべきである。
- 子宮がんについては、頸部がんと体部がんが混同されるなど、国民の知識が必ずしも十分ではないと考えられるため、その普及啓発が急務である。

VI 提言

○ 今まで述べてきたことを踏まえ、当検討会としては、以下を提言する。

1 検診の見直しについて

(1)乳がん検診

①検診方法

○ マンモグラフィによる検診を原則とする。その精度を補完するために、当分の間は視触診も併せて実施することとする。

②検診対象年齢

○ 40 歳以上とする。

○ 30 歳代の視触診単独検診及び超音波検診については、今後引き続き調査・研究を進める必要がある。

③検診頻度

○ 2年に1度とする。

(2)子宮頸部がん検診

①検診対象年齢

○ 20 歳以上とする。

②検診頻度

○ 2年に1度とする。

(3)子宮体部がん検診

○ 有症状者(ハイリスク者)に対しては、第一選択として、十分な安全管理のもとで多様な検査を実施することができる医療機関の受診を勧奨する。

○ しかしながら、適切に精密検査を実施できる機関の確保が困難である等の地域では、本人が同意する場合には、子宮頸部がん検診に併せて、適切な安全管理のもとでの子宮体部の細胞診を実施することも可とする。

2 検診の実施体制の整備について

(1)乳がん検診

- マンモグラフィによる検診については、速やかに導入を図るべきであり、2005 年度からは全市町村で受診が可能となるよう、国や都道府県、市町村及び検診機関、関係団体等が連携し、必要な措置を行っていくことが必要である。
- マンモグラフィによる検診においては、機器の精度管理や撮影する技師及び読影する医師の確保ならびに質の向上が重要であることから、国や都道府県、市町村及び国立がんセンター、医師会、学会等の関係団体が互いに連携し、検診に携わる放射線技師や医師等に対する研修の充実、人員の確保に努め、十分な精度管理のもとに実施されるよう取り組んでいくことも必要である。
- また、検診後に精密検査を実施する医療機関における精度の確保も重要課題であり、これに取り組んでいくことも必要である。

(2)子宮がん検診

- わが国では、妊娠時の健診をほとんどの妊婦が受けているが、子宮頸部がん検診の効率的な実施のために、初回妊娠時の妊婦健診などの場で子宮頸部がん検診を併せて実施するべきである。

3 普及啓発について

(1)乳がん

- わが国の乳がんは女性の一生を通じて見た場合に、概して 30 人に1人以上が罹患する疾患となっている。乳がん検診を受けない理由として、自分には関係ないと思っている女性が多いと言われており、今後、検診や治療について普及啓発や教育を充実すべきである。特に 40 歳代からの罹患率が高いことから、早期発見するために2年に1度マンモグラフィによる検診を受けることを強調しなければならない。
- 自己触診については、日常の健康管理の一貫として実施し、それによりしこりが触れるなどの自覚症状を認めるときは、検診の機会を待つことなく、速

やかに乳房疾患の治療を専門とする診療科(乳腺外科等)を受診することが重要であり、このための普及啓発をより一層図っていくべきである。

- また、乳がんについて、症状や検診、治療法等について不安を持つ女性も多く存在することから、個別の相談体制について充実を図っていく必要がある。

(2)子宮がん

- 子宮がんについては、子宮頸部がんと子宮体部がんとで発生する部位が異なるだけでなく、その好発年齢や危険因子、検診の方法、治療の方法等が異なっていることなどについて、国民に対して、広く周知することが必要である。
- 特に子宮頸部がんの多くは、性感染症であるヒトパピローマウイルスの感染が原因となっている。ヒトパピローマウイルス感染の予防等の普及啓発を図るべきであり、その効果的推進にあっては、若年者への性教育と連動した子宮頸部がんについての健康教育を推進すべきである。
- 子宮体部がんの検診については、その対象や検査の精度やその安全管理、診断や治療について検証することが必要である。そのため、日本産科婦人科学会を中心とする関連学会等によって、子宮体がんについてのガイドラインを速やかに作成されることが望まれる。

Ⅶ おわりに

- 本中間報告書は、増加を続けるがんの罹患率及び死亡率の激減を目指して、有効ながん検診を確立することを目的としてとりまとめたものである。今年度は、乳がんと子宮がんについて検討を行ったが、今後、引き続き市町村で実施されているがん検診や新しいがん検診についても検討していく予定である。
- 国や都道府県、市町村においては、本中間報告を踏まえ、乳がん検診及び子宮がん検診の方法及び対象、実施体制等の見直しや整備を行うとともに、医療関係者及び国民への普及啓発など具体的な方策を検討・実施することを期待する。
- また、検診関係者においては、あらゆる機会を通じて本中間報告の内容の国民への普及啓発に努めるとともに、国民が希望する効果のあるがん検診が実施できるようあらゆる努力が図ることを期待する。
- さらに、本中間報告書を契機として、国民ひとりひとりが、がんの予防についての知識を高め、自らがんの発生を予防する活動を実践することを願っている。

-
- ※¹ 「新たながん検診手法の有効性の評価」研究報告(平成13年3月(財)日本公衆衛生協会、主任研究者:久道茂)
 - ※² 厚生労働省がん研究助成金による『地域がん登録』研究班(主任研究者:津熊秀明)の推計値より
 - ※³ 人口動態統計(厚生労働省大臣官房統計情報部)
 - ※⁴ 地域保健・老人保健事業報告(厚生労働省大臣官房統計情報部)
 - ※⁵ 平成14年度地域保健・老人保健事業報告(厚生労働省大臣官房統計情報部)で受診者が計上されている市町村の割合
 - ※⁶ がん検診に関する効果的な推進手法の開発に関する検討報告書(平成15年3月(財)日本公衆衛生協会、主任研究者:辻一郎)
 - ※⁷ 「早期乳癌比率と中間期乳癌発生率からみたマンモグラフィ併用検診の適正な検診間隔」日乳癌検診学会誌 5(2): 245-248, 1996.(大内憲明、他)
 - ※⁸ Sawaya GF et al Risk of cervical cancer associated with extending the interval between cervical-cancer screenings N Engl J Med 2003; 349:1501-9
 - ※⁹ Sasieni P et al Benefit of cervical screening at different ages: evidence from UK audit of screening histories. Br J Cancer 2003; 89: 88-93

がん検診に関する検討会構成

- 安達 知子.....東京女子医科大学産婦人科学助教授
- 遠藤 登喜子.....国立名古屋病院放射線科医長
- 大内 憲明.....東北大学大学院医学系研究科教授
- 垣添 忠生.....国立がんセンター総長
- 斎藤 博.....国立がんセンターがん予防・検診研究センター検診技術開発部長
- 櫻井 秀也.....日本医師会常任理事
- 笹子 充.....国立がんセンター中央病院第一領域外来部長
- 清水 弘之.....岐阜大学医学部公衆衛生学教授
- 田中 憲一.....新潟大学医学部産婦人科学教授
- 土屋 了介.....国立がんセンター中央病院副院長
- 渡辺 昌彦.....北里大学医学部外科学主任教授

(敬称略、五十音順、○は座長)

がん検診に関する検討会における検討経緯

2002年

第1回(12月3日)

- がん検診の有効性の評価について
- 市町村で行われているがん検診の現状について
- ヒアリング

辻一郎(東北大学大学院医学系研究科)

2003年

第2回(1月16日)

- 乳がん検診について
 - ヒアリング
- 岡崎邦泰(岡山県医師会)
永井宏(日本産婦人科医会)
森本忠興(マンモグラフィ検診精度管理中央委員会)

第3回(1月27日)

- 子宮がん検診について
 - ヒアリング
- 青木大輔(日本産科婦人科学会)
佐藤博信(宮城県医師会)

第4回(2月26日)

- 乳がん検診・子宮がん検診について(論点整理)
 - ヒアリング
- 今井恵子(聖マリアンナ医科大学放射線科)

第5回(3月12日)

- 乳がん検診・子宮がん検診について(論点整理)
 - ヒアリング
- 西川千佳子

第6回(3月18日)

- 乳がん検診・子宮がん検診についてのとりまとめ